ANTEC 2007

I. ANTEC 2007に参加して

濱 田 泰 以*

米国プラスチック工学会 (Society of Plastics Engineers; SPE) の年次大会, ANTEC は, プラスチック工学に関する世界最大の研究集会である。この ANTEC に参加し講演発表することは, 世界中の研究者・技術者との議論を行うだけでなく, 新たな研究情報を得る機会でもある。筆者はこの 15 年, 本学会に参加してきた。ここで, 今年の ANTEC の感想と筆者の思いを紹介したいと思う。今年の ANTEC は, 2007 年 5 月 6 日～11 日の日程で, オハイオ州シンシナティにて開催された。今回のキャッチフレーズは “Plastics Encounter” であった (写真 1: 受付の様子)。発表件数は約 640 件であり, 工業特性と構造が最大で 80 件程度, 射出, 押出, 複合材料と講演件数が多い。また展示会も盛況で, 日本メーカーからは, キヤノン, JSW, テクノベル, 東洋機械など数社が展示していた (写真 2: 展示会の様子)。

筆者と ANTEC のつながりは深く, 少し思い出について紹介する。

“ANTEC” と聞くと, ほろ苦い思い出と楽しい思い出の両方がある。前者は, 初めて ANTEC を知り, チャレンジしたほぼ 15 年前ごろ。秋に提出した 4～5 ページの Full Paper の査読の結果が, “Reject” であったことである。どうにか手に入れたプログラムを見て, これはおもしろいから是非参加しようと決めて, 用意して Reject だったからショックは大きかった。“やっぱりむずかしい学会なんだ”, “今一度チャレンジを!” と心に決めて “Reject” されたことは人には言わなかった。その後調べてみると, 関係者で “Reject” の結果をいただいた方は一人もいないことがわかった。“ANTEC で Reject なんて聞いたことがない, それはさかさまに名誉なことだな” などと言われる始末であった。でもあの時はまさしく Reject であり, それががんばろうのドライブフォースになったことは事実である。

楽しい思い出は, もちろん海外の研究者の方々や日本から出席されている数少ない日本人の方々と交流することである。元会長の成澤先生が出席されたボストンで, カフェテラスで当時ミシガン大の Yee 先生とシドニーの Mai 先生, 成澤先生と 3 人の先生方が談笑されているのを見つけ

写真 1 受付の様子

写真 2 展示会

て, “あの方々でいろんないい仕事されているよなー” と思っていたら手招きで成澤先生に呼ばれ, 2 人の先生を紹介してもらったこともいい思い出として残っている。また, 学生さんたちといっしょに合宿状態のような様相も思い出深く, “発表が終わったら, ステーキ” を合言葉に, 皆で練習会をホテルでやり, 本番終了後, あり金をはたきステーキで盛り上がった。それが恒例になり, 今も学生さんにはステーキのおごりである。

ANTEC の Proceeding には 4～5 ページの Paper を出すので, 博士課程の在学の学生さんたちのいい中間まとめ

* Hamada, Hiroyuki
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科先端ファイブ科学部門
京都市左京区松ヶ崎御所海道町 (〒606-8585)
2007. 6. 20 受理

写真3 日本人参加者による懇親会の様子

だと思っている。最近は社会人学生の方々と一緒にすることが多く、平均年齢の高い一団となっているし、また留学生の方も一緒なので日本から来ている割には、国際色豊かである。

さて国際色で言うと、ここ2～3年のANTECは韓国の方の参加が非常に多いように思われる。もともとゴールデンウィークに日程が重複していたこともあり、日本人の参加はきわめて少なかった。しかし山形大の伊藤先生がSPEの日本支部の役員になられてからは、ANTECにも参加され、セッションもオーガナイズされている。また日本人の集まり、夕食会を企画されておられ、一年に一度この夕食会でお会いできるアメリカ在住の日本人の方もおられるようになった(写真3)。伊藤先生の努力は徐々に実を結びつつある。しかしそれより爆発的に増加している韓国からの参加者には脅威の何ものでもない。

セッションは、ほとんどは企業の研究者たちで運営され

ている。企業と大学の垣根が低いアメリカであればこそできるかもしれないが、それにしてもすごい、つまり多くの企業人が運営に携わっている。人にもよるがセッションリーダーは“優しい”。前もってメールは来るし、終了しても来年また会おうとメールが来る。発表後の質問でやはり日本人が質問がわからなくなると優しく繰り返し言うくれるし、発表の過去の文献も調べておいて、発表者より明確に研究の流れを説明してくれたリーダーもいた。この優しさはなんだ!? と驚くことしきり。アメリカで初めて出会う優しさかもしれない。こうなるとやっぱり来年も来ようかと思ってしまう。そのための作戦か?

その昔、ガスインジェクションが出始めたころ、ガスインジェクションのセッションは、その部屋に入れない。いっぱい。廊下で聞き耳を立てて聞いている始末。2年それが続いて、そのあとはガスインジェクションのセッションは消えた。これがANTECの良いところであり、悪いところでもあるかもしれない。良いところをうまく利用して参加したメリットを見つけようとする。それからすると今はナノ・マイクロ成形であろう。独立したセッションとしてナノ・マイクロ成形がとりあげられており計22件の発表があった。ちなみに射出成形は28件であった(さらに26件がポスター発表である)。その昔、ANTECでは複合材料はほとんど扱われていなかった。したがって複合材料研究を行っていた筆者にとってANTECに行くことは、本格的にプラスチック成形加工の分野に行くぞという自らの決意の表れであった。時が過ぎ今年のANTECでは、トータルで101件の複合材料と名のついた講演があった。そのうちナノコンが34件である。様変わりかと思いきや、従来からの長繊維熱硬化性樹脂複合材料は8件にすぎない。しかし新しい複合材料が生まれ、それが次の時代を引っ張っていくのであろう予感がしており、複合材料をしていてよかったと実感したANTECであった。

Ⅱ. 二軸押出セッションを中心に

石 川 健*

ANTECは成形加工に関する国際会議としては最大規模を誇り、アカデミアというよりは実利に基づいた発表が多いことが特徴であろう。筆者のように企業での研究開発に従事している立場からすると、ANTECの発表内容が最近の企業の動向を反映しているもの捉えており、毎年予稿集を入手しては研究開発のトレンドを探ることが習慣となっている。さてこのように筆者の中では重要な位置づけである本学会ではあるが、残念ながらこれまで一度も参加したことがない。しかしながら今回、学会に参加することにより得られる情報への期待や学会の雰囲気を知ること、更に

はExtrusionセッションで発表の機会を得たこともあり、Cincinnatiで開催された本学会に初めて参加した。

本学会では膨大な発表件数を約3日間でこなすために、講演は朝8時から18会場での同時進行で行われた。そのため講演会場3フロアにわたって効率良く配置されており、各会場への移動はスムーズではあった。しかしながら聴講にあたっては十分な下準備がなければ、興味ある分野を網羅することはできない。これは反省の意味を込めてである。また、会場の規模も聴講者数を意識して選択しているわけではなさそうで、立ち見であふれかえる会場も幾つか見受けられた。ただし全般には聴衆がまばらな会場が多く、発表件数の割には参加者が少ないとの印象を受けた。更には休憩時間に通路が参加者で混み合うようなこともなく、このこともこのような印象を強めた要因である。

* Ishikawa, Takeshi
(株)三菱化学科学技術研究センター
R&D 部門 高分子技術研究所
四日市市東邦町1 (〒510-8530)
2007.6.18 受理